

手塚治虫作品―その1『アドルフに告ぐ』―

萩原 義雄

手塚治虫作品『アドルフに告ぐ』―歴史のなかにタイムスリップ―

小説に「歴史小説」というジャンルが存在するとすれば、漫画にも「歴史漫画」というジャンルを求めてみても好かろう。この「歴史」という教科がもつとも苦手だった手塚治虫が取り組んだことを私は評価したい。手塚治虫は、日本の歴史と世界の歴史とを両用した。日本の歴史物に『陽だまりの樹』『ビッグコミック』の第八作目として発表)、世界の歴史物にこの『アドルフに告ぐ』(□)を前者『陽だまりの樹』を発表して二年後の一九八三年(昭和五八年)に同時進行形でこの大作を『週刊文春』に連載するのである。ここに登場する三人の「アドルフ」を彼の勢いあるタッチ描写で描いてみせる。

三人の「アドルフ」とは

まず一人はといえば、ナチスの党首「アドルフ・ヒトラー」である。あとの二人は、「アドルフ・カウフマン」と「アドルフ・カミル」という、日本国神戸に居住していた独逸国籍の少年なのである。「カウフマン」は、ドイツ総領事館員と日本人の母親との間に生まれたこともで、やがて父の祖国独逸に帰国し、ヒトラーにかわいがられて彼の秘書官に抜擢される。そして、歴史に残るユダヤ人迫害の尖兵(せんべい)となっていくのである。次に「カミル」の方は、ユダヤ人のパン屋の息子で、父亡き後迫害に耐えながら日本で生き抜いてゆく。

この作品の展開は、一九三六年八月、ナチス独逸の国威発揚策(こくゐはつようさく)に利用された「ベルリン・オリンピック」の開催にはじまる。このスポーツの祭典取材する新聞記者峠草平(とうげくさへい)は、独逸ベルリン大学に留学中であつた弟勲(いむね)に会うとするが、訪ねた下宿は留守だつた。その三日後、オリンピック開場の記者席に、弟の方から電話が掛かってくる。勲は「公開されたらヒトラーは失脚する」という重大な情報の含まれた秘密文書を兄にどうしても手渡しなかつたのである。だが、約束の時間に遅れた兄草平は、弟勲の惨殺死体に対面する。

この秘密文書の情報内容とは、「ヒトラーはユダヤ人だ」という当に驚愕すべき内容を証明する手紙だつた。この文書は人知れず日本国神戸に運ばれ、これを死守する草平達とこれを奪還しようとするゲシュタポの闘いが物語の最後の最後まで続く。この秘密文書の手紙を奪還する使命を帯びた「カウフマン」がこれを見付けたとき當のヒトラーはこの世の人ではなかつた。

「ヒトラーはユダヤ人だ」

「ヒトラーはユダヤ人だ」という秘密文書の証拠となる手紙がなぜこのような諍(しやう)いまでまきおこす起爆剤だつたのかは、言わずもがなであろう。ナチスがユダヤ人を劣等民族として迫害し、果ては虐殺していったその首謀者がヒトラー自身の血にも流れているのであれば、第三帝國は当に重大な自己矛盾に陥るからである。これまで劣等民族であるユダヤ人を虐殺するという決定は覆り、その党の最高指導者が己の血肉細胞を自己破壊しつづけていたことになり、これにアーリア人が荷担していたということに成りかねないからである。

この血肉細胞の破壊はともかく、同胞に対し何をもつて異端視し、差別し、抹殺するのか、其の行為そのものが正当化しようとする理屈や巧妙な行為が許されるものではない。民族差別は、感覺的・生理的直感によつて

も否定されるべきことであるからだ。

例えば、忠実度の訓練のためにユダヤ人銃殺を命じられたアドルフ・カウフマンは、幼馴染みのユダヤ人カミルの父親を射殺したあと、言いようもないほど悶え苦しみ嘔吐する。ヒトラー・シュレー教官は、彼にこう言う。

「無理もないさ、気にするな。おれも最初は自分が殺した死体を見たとき吐き気がしたよ。おれは前の戦争の時、志願兵で前戦へ出た。十八歳の時だ。それでもすぐさまフランス兵を殺した。だが、敵を殺すことを平然と行えるようになるには、一年もかからなかった。君もじき慣れる」(三卷 146〜147頁)

この促しは、教官自身の体験則に基づく慰めであり、教導でもある。人は習うより慣れると教わるが、この慣れによる感覚の麻痺ほど怖ろしいものはない。「慣れ」の付くことばを頭に浮かべてみるが良い。「なれの果て」「なれあい賣買」「なれあい夫婦」「なれなれしい」「どうも「なれ」は「成れ」でも「慣れ」に通じていく。謂わば、「自らを圧殺する」行為でしかない。この主人公であるアドルフ・カウフマンのこの嘔吐は、自分が銃の引き金を引いたその瞬間に己本来の人間性を失う結果と成っていくのである。その証明の時でもあった。一度性を失った人間は底なし沼にズルズルと吸い込まれ行くようにいとも簡単に無感覚な死に近い状態に落ちていくのであろう。

希望あふれるひとり一人の未来の夢見ることもを、そして少年を、青年をこのような心理性の自殺者に追い込んでいこうとしたナチス党支配の状況をももの見事に見せている。この状況化におかれた十八歳の少年は、この現況下ではどんなにふりほどこうにも時代の権力という圧力から守護してくれるものではない。この忌まわしい人の歴史の一齣は、食虫植物のように、個性ある感覚や理性までも溶解液のなかに浸かし続けていくのである。

「…わが情報部から二日前に届いた手紙を解読したものだ」「読みたまえ」という聲に促されて、

「……………これは本当か!」「なんと…」

秘密文書を読む人が発した作中の独話ことばである。この顔の表情には驚きと焦りがにじみ出ているから臨場感は抜群である。ユダヤ人虐殺の張本人たるヒトラーその人がユダヤの血族であったという設定は、ユダヤの民に向けた牙を己自身にも向けることになった。この展開状況が自己を否定することへの暗喩表現による問題の提示でもある。

また、幼い日のカウフマンは、父親からカミルと仲良く遊ぶことを禁じられる。ユダヤ人を敵視するアーリア人の神戸キリスト教学校の教師達にも反発してみせた。こどもにだけ持つて生まれた天性の自然感覚が、大人の紡ぎ出した歴史という枠組みに収まらない時期でもあった。人は皆、状況に応じて「歴史」からの脱却といった大きな課題を担わせられていく。

子どもに人殺しを教えるべからず

ファシズムの敗北と同時に第二次世界大戦は終息した。にもかかわらず悪魔サタンのような甘い誘惑の匂いをする。「歴史」は尚も蕃息はひかり続ける。そしてこの物語における登場人物に対して一層容赦なく迫り来るのである。主人公のカウフマンは、ナチスの残党を付け狙うイスラエル(ユダヤ人)によって新たに建国された国家の追っ手から逃れ、パレスチナに身を隠す。やがて彼は反イスラエルのアラブ人によるパレスチナ解放戦線の組織に加入する。

この一方、カミルはイスラエル軍人として、反パレスチナ戦争の指揮官になっていた。このカミルの指揮するイスラエル軍は、カウフマンのアラブ人の妻と娘の住む町を襲い、一人を殺害する。このとき、カウフマンは過去の自分がナチス党員であったときの出来事を直下立った断崖絶壁のような地の奥底からその悔恨の情として甦らせねばならない心的状況を味わうのである。それは彼が正義という名の下に「ユダヤ人を殺せ!」という洗脳教育が今のパレスチナには必要なのだという妻の発揚にも同意すらできないのである。そして、心のなかでこう呟いた。

おれはあの日から(カミルの父を殺してから)、何千人ユダヤ人を殺したかな……………だが、子どもの頃の恐ろ

しきは忘れられん。

今のおれには、ユダヤがなにをしようと、アラブがどうしようと関係ないことだが、子どもに殺しを教えることだけはごめんだ。世界中の子どもが、正義だといって殺しを教えられたら、いつか世界中の人間は全滅するだろうな。〔第五卷 221頁〕

こんな穏やかに冷静に物事を見つめることのできたカウフマンだが、いざ妻と娘の命を奪われると、再び殺意の炎が彼をつきあげてきてしまう。彼は「アドルフに告ぐ」と題したビラを作成してこれを町中にばらまく。そのビラ紙にはこうあった。

イスラエル軍 24 師団 382 部隊所属アドルフ・カミル中尉に告ぐ。二人だけで話しをつけたい。これを読んだら、次の土曜の夜、ジザール高原のナビ地区へ独りで来い。男なら卑怯な真似をするな

と書かれていて、アドルフ・カウフマンのサインが添えられていた。この話し合いに彼はカミルに撃たれて死んでいく。

呪いという歴史

数年後、峠宗平はイスラエルを訪ねる。三人のアドルフについての記録を一冊の書物に纏めようとする草平は、この物語の締め括りにテロ爆弾の巻き添えになって死んでいったカミルの墓参りをしようとやってきたのである。この草平の綴った一冊の記録書物の題名は『アドルフに告ぐ』とある。手塚治虫はこのとき、漫画家であり、作中草平の手を借りた物書き則ちドキュメンタリー作家になり得ていたのである。この漫画がユダヤ人墓地に一人佇む年老いた草平を描き出すのもこの結末故である。冒頭の三頁文のナレーション部分を拾い取ってみよう。

これは、アドルフと呼ばれた三人の男たちの物語である。彼ら二人はそれぞれがった人生をたどりながら、一本の運命の糸に結ばれていた。最後のアドルフがこうして死んだ今、その物語を子孫に伝えようと思

う。

三人のアドルフを結びつけた運命の糸とは、一体何であったのだろうか？ドイツ人と日本人の混血であるアドルフとユダヤ人のアドルフとは少年時代の竹馬の友であったにもかかわらず、最後はお互いを憎しみ合わねばならない定めが待っていた。この相互の憎しみの根源を内包し続けて生きたのがユダヤ人とドイツ人の混血であったもう一人のアドルフなのであった。

この書物の題名『アドルフに告ぐ』の意味するところは一体全体何だったのかを講座受講者である諸君らに問いたい。そして、最後に最も苦手とした「歴史」そのものに挑んだ漫画作家手塚治虫が教えたかったことをどう見つけることが出来るのが今回の講義における最大の焦点とも成ろう。〔完〕

コラム1 芸術表現

○峠草平「今鳴っている行進曲は弟が日本でよくレコードで聴いていたつけ」「ん？だれの曲だつけ？」／ローザ・ランプ「タンホイザーのマーチ」よ「リヒャルト・ワグナー」よ総統の大のお気に入り曲だわ」／峠草平は ふとりヒヤルト・ワグナーという名が妙に気になった その頭文字も R・W だったからである…〔第二卷 40 頁右〕

○クルト。シヌメルツ男爵「さよう！ ワグナーこそニーチエの精神の高揚です！」